B子「ここわたしの部屋よ」
D子「ここわたしよ」と階段を一段ずつ決める。
B子「時々遊びに行くのよこうやって」と階段をおりてみせ、あなたたちはこうやってと階段をあがってみせ、「リーとベル押すのよ」
D子「わたしやってみよう」とやってみる。リー。
C子「どうぞ」。上の段に三人すわる。
B子「わたし遊びに行って来るわ。ここ開かないの」
D子「ひらけーごまというと開くわよ」
◇一一・三五
＜保育室＞
二人の男児絵をかきだす。
二人の女児がのぞき」あらどうしたのでしょう。あそこ三人」と三ついすの並んでいるのを指して言う。絵をかいていた子やめて「先生お弁当にしていい？」。先生うなずく。「川の組おべんとう」とふしをつけて叫ぶ。だんだん叫ぶ子がふえ、あちこちからとんで来る。

保育者の立場

○最近感じていたこと

最近あそびに発展性がないことを感じていました。皆がただワァーと集まって、別に目的もなくさわいで、ワァーと去ってしまうようなのです。そしてなんとなく私の目を避けている感じなのです。それで困ったことだなと考えている時、三才児が写真機をつくって遊んでいたのですが、誰かが遊戯室へ忘れて行ったのです。それを私のクラスの子どもがひろって来てしばらく遊んで返してあげました。おもしろそうに遊んでいたので、私は、皆が写真機をつくって「写真やごっこ」ができたらと思いました。それで「ぼくたちも写真機つくったら」とちょっと言うと「三才の子ができたから、ぼくたちにできないはずないな」などと言いながらつくり始めました。発展させたいという意図があったので、むつかしいところを手伝いました。店屋のワクをおいて、「しゃしんや」と書いておきました。子どもたちはすぐ私の書いた看板を破ってしまって、「かすみしゃしんや」などと自分たちの字で書き、その横へ「ちょっとおやすみです」とか「おやすみ」とか書いたりし楽しく遊び始めました。それから、やたらにダーと走りまわることが止みました。それまで、玄関、テレビ室、山の上、子どもの家など私の目のとどかない所で遊んでいたのが、保育室で遊ぶことが多くなり、私のそばにいることが多いので、私の意図が伝わりやすく、遊びが変わってきました。写真屋はどんどん発展し、種々な色の紙テープをカラーフィルムにしたり、写真をとりに行くと写真に写ったところをかいてくれたりしました。私には何か写真屋ごっこの経験を通して、遊び全体がおもしろく、発展性のあるものになってきたように思えます。

○このクラスの子どもの特徴

このクラスはグループがたいへん早くでき、しかも大きいので

す。おにごっこなど、ほとんど皆で一団となってやっています。グループとしてのまとまりが良く、リーダーの言うことを良く聞きます。反抗する子が少ないのです。リーダーは知能の高い子より、人気のある、常識的で、あたりの柔らかい子がなっています。みなよく隊長と呼んでいます。リーダーになってもいいと思う子がならないので、調べてみると、兄弟が多くて、真ん中でもまれているので、妥協してうまくやることを知っているらしいのです。

よそのクラスの子は皆おしゃべりしながら何かをするのですが、このクラスは絵をかく時も、製作する時も、黙々としてやっています。女児に、はでに口をきく子がいないのです。集団としては扱いよいのですが、何かつまらない気がします。

○音楽リズム

週二回遊戯室が使えます。保育室で一回か多くて二回、音楽リズムをします。音楽リズムが、絵画製作に比べて割合が大きいようです。リズム表現はことばで誘導します。動作で誘導するとまねになりますから。こう言うのもある、誰さんはこうしてた、と考える余地を与えるようにします。

○消極的な子ども

いつもひとりでいてあまりいろいろなことを積極的にやらない子ども、誘わなければ何もできない子どもは、私の方から誘います。スカイジムなど数少ない運動具は、勢力のない子どもは誘いかけてあげないと使えなくなってしまいます。

○クラスの子どもの入園時

二十人が四才に入園した子ども（即ち始めから受け持った子）、あとの十七人は三年保育から上ってきた子どもで、そのうち八人は他のクラスから、九人は私の持ち上がりです。四才で入園した子、私の持ち上がりの子は扱いよいのですが、他のクラスから来た子が一番やりにくく、主として「子どもの家」など私の目を避けて遊ぶ子どもは、この子どもたちです。

○入園当初苦労したこと

どうしたら子どものありのままの姿を、幼稚園において出させることができるかに苦労します。そのために一カ月も二カ月もかけます。子どもがありのままの姿を示さなければ、子どもの個性もつかめませんし、「教育」は始まりません。それで「先生の存在」をあまり強く感じないように注意します。時々「おかあさん」なんて呼ばれる時には、ひょっとしたらあわてて間違えたのでしょうが、「ああ、家庭を幼稚園と取り違えるほど気楽に感じているのだな」などと思ってうれしくなります。

入園当初に基本的生活習慣としてさせることは、食事前、砂あそびなどよごれた時の手洗いのように、どうしてもしないと病気になるとか、どうしても守らないと危険だとか、上ばきと下ばきをかえるなど最少限のことにとどめます。

今も、私共の願いは

元園長倉橋惣三氏の「育ての心」にあるように「子どもと共に喜こび、子どもと共に悲しむ」先生でありたいということです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊